

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 福永 直子

論 文 題 目

2型糖尿病の日本人高齢者における脈圧と全死亡との関連

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 本田 育美

名古屋大学教授 佐藤 一樹

名古屋大学教授 玉腰 浩司

論文審査の結果の要旨

2 型糖尿病患者の看護を行う際、看護師は、血糖値、収縮期血圧、拡張期血圧には注意を払うが、脈圧に対する関心は低い。脈圧と予後に関して、多くの研究が広い脈圧と心血管イベント及び全死亡リスクの増加との関連を報告している。一方、その関連は収縮期血圧と拡張期血圧で説明できるとの報告や脈圧と予後は関連しないとの報告もある。結果が一致しない要因として対象者の年齢や基礎疾患の有無等の背景の違いが考えられるが、これまで高齢糖尿病患者を対象とした研究はみられない。そこで、本研究では、65 歳以上の日本人高齢糖尿病患者を対象に脈圧と全死亡との関連を検討した。

解析対象者は、2004 年 9 月に糖尿病を専門とする 3 医療機関の外来を受診し、日本糖尿病学会の 2 型糖尿病診断基準を満たした 65 歳以上の患者 357 名(平均年齢 74.9 歳、男性 175 名、女性 182 名、平均追跡期間 7.7 年)であり、観察期間中に 50 名の死亡を確認した。




本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. Cox の比例ハザードモデルを用いて、年齢、性、ヘモグロビン A1c 等で調整し、脈圧 55mmHg 未満群を基準とした相対危険度は、55mmHg 以上 65mmHg 未満群、65mmHg 以上 75mmHg 未満群、75mmHg 以上群でそれぞれ 1.77 (95%信頼区間：0.59-5.28)、2.66 (0.93-7.56)、3.23 (1.16-8.99) であった。相対危険度は脈圧が広くなるにつれて有意に高くなる傾向がみられた(傾向性 $p=0.013$)。また、脈圧 65mmHg 未満群を基準とした 65mmHg 以上群の相対危険度は 2.08 (1.11-3.92) であった。
2. 収縮期血圧と拡張期血圧はともに単独では全死亡との間に有意な関連はみられなかった。

本研究結果は、高齢糖尿病患者を看護する際には脈圧にも注意を払う必要があることを示唆しており、臨床的に意義深いと考えられた。尚、本論文の主たる内容は、Japan Journal of Nursing Science (2021 JCR Impact Factor: 1.691) に掲載された。

以上の理由により、本研究は博士(看護学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※第	号	氏名	福永 直子
試験担当者	主査 名古屋大学教授 本田 育美 	名古屋大学教授 佐藤 一樹 	名古屋大学教授 玉腰 浩司 	
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 脈圧と疾患発生や死亡との関連に関する過去の研究結果について 2. 脈圧を看護ケアの根拠として用いる際の留意点について 3. 本研究におけるインフォームドコンセントの方法について 4. 本研究におけるデータ収集の方法について 5. 本研究における患者の転帰の把握方法について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、看護学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				